

学習者の性格要因・英語学習動機づけ 及びエンゲージメントの関連性

染谷 藤重・木村 一男*

Relationship Between Learner Personality Factors, Motivation, and Engagement in English Language Learning

Fujishige SOMEYA and Kazuo KIMURA*

Accepted December 12, 2023

抄録：本研究は、高校生英語学習者（参加者数： $N = 962$ ）を対象として、性格特性が英語学習における動機づけ（心理的欲求の充足）とエンゲージメントに与える影響を調査した。量的調査法と構造方程式モデリング（SEM）を用いて、開放性、誠実性、外向性、協調性、および情緒不安定性という五大性格特性と心理的欲求充足、エンゲージメントとの関連性を詳細に検討した。分析結果から、五大性格特性が動機づけに対して有意な関連性を持つこと、心理的欲求充足がエンゲージメントに対して強い影響を持つこと、さらには性格特性自体もエンゲージメントに対して独自の影響を持つことが確認された。この研究結果は、教師が生徒一人ひとりの性格特性や心理的欲求を理解し、それに基づいて個別化された教育方針を策定する上で、貴重な示唆を提供すると考える。

索引語：性格特性、動機づけ、エンゲージメント、英語教育

Abstract: This study explored the impact of the Big Five personality traits on motivation, specifically, psychological need satisfaction, and engagement in English language learning among a sample of 962 high school students. By utilizing quantitative research methods and structural equation modeling, we conducted a comprehensive analysis to elucidate the relationships between the traits of openness, conscientiousness, extraversion, agreeableness, and neuroticism, as well as psychological need satisfaction and engagement. The results revealed significant associations between these personality traits and motivation, with a robust influence of psychological need satisfaction on engagement. Furthermore, individual personality traits exerted unique effects on engagement. These findings provide invaluable insights for educators to comprehend each student's psychological needs and personality traits, which thereby enable the tailoring of instructional approaches to meet individual needs.

Key Words: personality, motivation, engagement, English language learning

* 千葉県立船橋高等学校

1. はじめに

現在日本では、『新学習指導要領』において、小学校、中学校、および高等学校での自律的な学習者の育成が強調されている（文部科学，2017a, b, 2018）。この方針に基づき、同様に、英語教育においても自律的な学習が重要とされている。上記を達成するために、特に、教師が効果的な指導を行うには、生徒一人ひとりの性格特性を理解することが不可欠である。

性格特性は、Busch（1982）によれば、個人の行動、思考、感情に影響を与える要素であり、Ehrman and Dörnyei（1998）によると、これらは学習動機や学習成果に直接的な影響を持つ可能性があると考えられている。つまり、性格特性と動機づけの関係性を深く探ることで、教師は生徒の個々のニーズに対応した指導が可能となり、それが結果として学習成果の向上につながる可能性があると考えられる。このようなアプローチは、教育心理学、特に外国語教育の文脈での個別最適な学びの実現に向けて、重要な示唆を提供するものと期待される。

本研究では、高校生を対象に性格特性が英語学習における自律的動機づけと学習者エンゲージメントにどのように影響を与えるかを検証する。

この研究は、英語教育と教育心理学の交点に位置し、量的な分析を通じて、教師がどのように生徒の性格を理解し、それをどのように教育におけるプラクティスに活かすかについての新たな視点を提供する。具体的には、Big Five 性格特性（開放性、外向性、誠実性、協調性、情緒不安定性）と Self-determination Theory（自己決定理論）に基づく心理的欲求の充足及びエンゲージメントとの関連性に焦点を当てる。このような多角的な視点からの分析は、教師がより効果的な教育を行う手がかりとなると考えられる。

2. 先行研究

（1）性格特性について

本研究では、性格特性として Big Five の枠組みを使用した。Big Five は性格特性を扱う研究において現在最も多く用いられている（平野，2021）。しかしながら、Big Five と第二言語習得との関係を検証した研究は非常に少ない（Dörnyei, 2015）。本研究では、実際の調査には、参加者の負担を考え、並川ら（2012）が開発した Big Five 尺度短縮版を使用した。

1) Big Five とは

Big Five は、たくさんの特性を用いて包括的に個人の特徴を説明しようとする特性論の立場に立ち、語彙研究アプローチによって、辞書の人物描写の表現をリスト化し、因子分析を通して抽出された特性のことである（Norman, 1963）。Goldberg（1981）がどのように条件を変えても、類似した因子が安定的に抽出されることから、Norman（1963）の報告した 5 つの特性を Big Five と呼んだ。一方、質問紙が測定する概念を因子分析を用いて整理しようとする質問紙的アプローチも、同様に 5 つの因子に集約していった（Five Factor Model）。異なる 2 つのアプローチによって見出された 5 つの因子はお互いに高い関連があることが示されている（橋本，2023）。

2) 5つの性格特性

Big Five の 5 つの性格特性の特徴について説明する。開放性はさまざまな物事への関心・興味を持つこと、空想することに関係する特性を示す (三枝, 2023)。また、曖昧さへの耐性、複雑な物事を好むという傾向があり (McCrae & Costa, 1997)、知能との高い正の相関があることがわかっている (三枝, 2023)。誠実性は、セルフコントロール、責任感、勤勉さ、規律正しさ、規則を守る傾向を表す (川本, 2023)。また、健康や収入、対人関係などの人生における重要な要素を予測すると指摘されている (Jackson et al, 2015)。外向性の高い人は集会や会話を好み、活発でエネルギッシュであり、積極的に刺激を求める。感情面では、ポジティブで明るく、楽観的であり、運動量と正の相関があることが明らかにされている (谷, 2023)。協調性の高い人は、仲間から受容され、協力的であり、他者を助け、話し合いでの解決を望み、他者に対する肯定的な見方を有する (Tobin & Gadeke, 2015)。情緒不安定性が強い人は、不安や怒り、罪悪感、抑うつなどの感情を頻繁に経験し、普通の刺激を脅威と捉え大袈裟に反応する (川本, 2023)。また、情緒不安定性は精神障害と強い関連を示している (Tackett & Lahey, 2017)。

3) Big Five と学習

阿部 (2023) は、メタ研究を中心に、Big Five と学業成績との関連を検証したこれまでの代表的な研究を紹介している。それぞれの研究から得られた成果は次のようにまとめることができる。誠実性が学業成績における強い予測因子であるという報告は非常に多い (Chamorro-Premuzic & Furnham, 2003; Nettle & Robins, 2007; O'Connor & Paunonen, 2007; Poropat, 2009, 2014; Vedal, 2014; Mammadov, 2022)。開放性の影響も多くの研究によって指摘されている (Nettle & Robins, 2007; Poropat, 2009, 2014; Vedal, 2014; Mammadov, 2022)。協調性の影響はいくつかの研究 (Poropat, 2009; Vedal, 2014; Mammadov, 2022) によって言及されている。一方、外向性の正の相関 (Mammadov, 2022) 及び情緒不安定性の負の相関 (Chamorro-Premuzic & Furnham, 2003) は一部の研究でのみ報告されている。

日本における Big Five と学習への積極的関与の関連についての研究としては、小平ら (2018) が興味深い成果を報告している。小平ら (2018) は準備・宿題、注視・傾聴、そして挙手・発言という 3 つの視点から生徒の学習への関与を評価し、Big Five の 5 つの特性との関連を調査した。検証の結果、準備・宿題は誠実性の影響が強く、注視・傾聴は誠実性、協調性、情緒不安定性の影響が大きく、挙手・発言には外交性と開放性が強く影響を与えていることが明らかにされた。

以上のことから、学業成績については誠実性、開放性が学業成績へ与える影響は大きいと考えられる。また、協調性はある程度の関連が考えられるが、外向性と情緒不安定性に関しては、あまり影響があるとは捉えられない。また、小平ら (2018) が示しているように、実際の授業においては、学習の様々な場面に合わせて、関連する特性がそれぞれ影響を与えている可能性が考えられる。

4) Big Five と第二言語習得

第二言語習得研究において、Big Five を用いて性格特性とコミュニケーション能力との関係を初めて検証したのは、オランダ語の学習者を研究対象とした Verhoeven and Vermeer (2002) の研究である。学習者のコミュニケーション能力は、Bachman and Palmer (1996) を参考にし、組織的能力、方略的能力、語用論的能力の 3 つの観点からそれぞれ課題等を通して評価された。

5つの性格特性との関連を検証した結果、開放性は3つ全ての能力と、外向性は方略的能力と、誠実性は組織的能力とそれぞれ関連があることがわかった。また、協調性と情緒不安定性はいずれの能力とも関連が示されなかった。

安田・鈴木（2017）は Big Five を用いて、性格特性が発話に与える影響を検証した。発話の評価には、complexity（複雑性）、accuracy（正確性）、fluency（流暢性）が用いられた。また、性格特性と発話を結ぶ媒介要因として、メタ認知（メタ認知コントロール）、創造性（拡散的思考・収束的思考）が想定され、質問紙と認知課題を用いてそれぞれ計測された。調査の結果、外向性から正確性への負のパス、情緒不安定性から流暢性への負のパス、誠実性からメタ認知コントロールへの正のパスなどの関係が明らかにされた。

上記以外に Big Five と第二言語習得の関連に関する目立った研究はなく、この分野における先行研究は非常に限られていると言える。また、本研究の目的である、第二言語学習に対するエンゲージメントとの関係を検証した研究は、現在のところ存在していない。

(2) 動機づけ

「動機づけ」とは学習や行動の方向性、持続性、強度を説明するための重要な概念である（Badridduja et al., 2022）。動機づけ理論の中に「自己決定理論（Self-determination Theory）」が存在する（Ryan & Deci, 2017）。自己決定理論は6つのミニ理論から構成されており、英語教育の文脈では、基本的心理欲求理論が用いられることが多い（染谷, 2020）。

1) 自己決定理論

自己決定理論（Self-determination Theory: SDT）は、教育心理学の分野で重要な理論の一つである。自己決定理論は個人の動機づけや学習行動に関する理論であり、その根本的な概念は、個人が自己決定的に行動することが、学習や成長において重要であるという考えに基づいている。さらに、この理論は、動機づけの内在性、認知的な過程、および学習の結果に焦点を当てて研究されている（Deci & Ryan, 1985）。

2) 基本的心理欲求理論

「基本的心理欲求理論（Basic Psychological Needs Theory）」とは自律性（Autonomy）、有能性（Competence）、関係性（Relatedness）の欲求充足が、内発的動機づけの促進、人間の成長、統合的な発達、ウェル・ビーイング（Well-being）のために不可欠であるという考え方である（Ryan & Deci, 2017）。

染谷（2020）は、鹿毛（2013, p. 184）及び廣森（2006, p. 13）をもとに、英語教育における3つの心理的欲求充足に関して、次のように言及している。

- ・ **自律性の欲求充足**： 行為を自ら起こそうという傾向性を指し、学習者が自律的に英語学習に取り組みたいと感ずること
- ・ **有能性の欲求充足**： 環境と効果的に関わりながら学んでいこうとする傾向性を指し、学習者が英語ができるようになりたい、あるいは英語の授業内容を理解したいと感ずること
- ・ **関係性の欲求充足**： 他者やコミュニティと関わろうとする傾向性を指し、学習者が教師や仲間と互いに協力的に英語学習に取り組みたいと感ずること

上記の心理的欲求の充足を授業内動機づけ要因として捉え、他の要因との関連性を検討しよう

とした研究が多く見られる (e.g. Jang et al., 2016; 染谷, 2023)。

(3) 学習者エンゲージメント

学習者の「エンゲージメント (Engagement)」とは心理的「没入」と表現でき、興味や楽しさを感じながら気持ちを集中させ、注意を課題に向けて維持するような「熱中」する心理状態である (鹿毛, 2013)。学習者エンゲージメントは「行動的エンゲージメント」「感情的エンゲージメント」「認知的エンゲージメント」に分かれているとされる (Christenson et al., 2012)。「行動的エンゲージメント」とは授業をはじめ、学習場面や学習課題における関与、努力や持続性、忍耐を含む概念とされる (梅本ら, 2016)。「感情的エンゲージメント」とは興味、退屈、不安、楽しさといった学習者の感情的反応に関する概念とされる (梅本ら, 2016)。さらに、「認知的エンゲージメント」とは洗練された深い学習方略 (精緻化など) の使用や、自己調整方略 (プランニングなど) の使用といった認知的な参加における概念であるとされる (Reeve, 2018)。

(4) 動機づけとエンゲージメントの関連性

言語教育における心理的欲求の充足とエンゲージメントの関連性は、多くの研究で注目されている。特に自己決定理論 (Self-determination Theory) に基づく研究が増えている。この理論によれば、心理的欲求 (自律性、有能性、関連性) の充足が学習者エンゲージメントに対して重要な影響を持つとされている (e.g. Jang et al., 2012, 2016)。また、同様に、Leo et al. (2020) も、心理的基本欲求の充足が学習者エンゲージメントを高める要素であると結論づけている。

3. 研究の目的とリサーチクエスション

(1) 本研究の目的

先行研究を踏まえた、本研究の目的は、高校生英語学習者の性格特性と授業動機づけ及びエンゲージメントの関連性を量的 (統計的) に明らかにすることにある。本研究によって得られた結果をもとに、性格特性、自律的動機づけ及び学習者エンゲージメントの観点から、今後の日本の高校英語教育において重要とされる可能性が高い事象について考察する。

(2) リサーチクエスション

本研究では、上記の目的を達成するために、以下 2 つのリサーチクエスション (RQs) を設定した。

RQ1 : 本件研究における 5 つの性格特性、心理的欲求充足及びエンゲージメント尺度の信頼性は十分なものであるか。また、それぞれの変数間にどのような関係性が存在するか。

RQ2 : 本件研究における 5 つの性格特性、心理的欲求充足及びエンゲージメントの関連性はどのようなものか。また、そのモデルの適合度が適切なものであるか。

4. 研究の方法

(1) 参加者・調査時期

本研究の参加者は、千葉県 A 市高等学校の 1～3 年生（計 962 名）であった。内訳は、1 年生 320 名・2 年生 318 名・3 年生 323 名である。調査協力校は英語教育に重点を置く学校であり、生徒たちは英語学習に対して概ね好意的である。およそ卒業生の 80% が英検 2 級又は 2 級相当の資格等を取得しているため、全国平均以上の英語運用能力を有する生徒たちであると捉えることができる。

調査は、2020 年 1 月～2 月の間に行われた。倫理的配慮として、成績に影響しないこと、アンケートへの回答は強制ではないこと、回答は自由意志であるということを最初に明記及び口頭により説明した。

(2) アンケート調査

本研究では、横断的データ収集を行なった。アンケートは、性格要因（Big Five 短縮版）の 29 項目（並川ら，2012）と基本的心理欲求理論をもとにした英語学習動機づけに関する質問の 9 項目（染谷，2020）、英語学習へのエンゲージメントの 13 項目である（染谷，2021）。

表 1. アンケートの枠組み

変数		項目の一例	項目数
性格特性	開放性	多才の	6
	誠実性	計画性のある	7
	外向性	社交的な	5
	調和性	温和な	6
	情緒不安定性	不安になりやすい	5
心理的欲求	自律性	授業では、自分が興味関心を持っていることができる	3
	有能性	難しい挑戦でも好んでする	3
	関係性	クラスの人と安心して授業に取り組める	3
エンゲージメント	感情的	課題や活動は楽しい	5
	行動的	課題や活動に一生懸命に取り組んでいる	5
	認知的	課題などの解き方を工夫している	3

(3) アンケート分析

分析は、IBM SPSS Statistics Base, Amos, Ver. 29 を用いて行われた。RQ1 に答えるために、記述統計量、信頼性係数（クロンバックの α 係数）、相関係数を算出した。その結果をもとに、RQ2 に答えるために、SEM（Structural Equation Modeling）を行った。

5. 研究の結果

まず、RQ1を検討するために、5つの性格特性、心理的欲求充足、エンゲージメントのそれぞれの変数の記述統計量、信頼性計数、及び相関係数を算出した。その結果を表2に示す。

表2. 各変数の記述統計量・相関係数（[] 内は信頼性係数）

	<i>M</i>	<i>SD</i>	1	2	3	4	5	6	7
1. 開放性	2.980	.747	[.763]	.011	.391**	.134**	-.123**	.198**	.193**
2. 誠実性	2.837	.724		[.768]	.054	.292**	-.044	.130**	.213**
3. 外向性	3.347	.932			[.879]	.153**	-.155**	.290**	.250**
4. 調和性	3.323	.689				[.771]	-.127**	.164**	.175**
5. 情緒不安定性	3.591	.920					[.837]	-.184**	-.012
6. 心理的欲求充足	3.390	.812						[.903]	.713**
7. エンゲージメント	3.532	.746							[.900]

Note: ** $p < .01$

信頼性係数（クロンバックの α 係数）を算出した結果、 $\alpha = .763-.903$ の間の値を取っており、各変数において、十分な信頼性を示した。さらに、相関分析の結果により、いくつかの変数間で有意な正の相関が確認された。具体的には、開放性は外向性（ $r = .391, p < .01$ ）、心理的欲求充足（ $r = .198, p < .01$ ）、およびエンゲージメント（ $r = .193, p < .01$ ）と正の相関があった。誠実性も心理的欲求充足（ $r = .130, p < .01$ ）とエンゲージメント（ $r = .213, p < .01$ ）と正の相関があった。外向性は調和性（ $r = .153, p < .01$ ）、心理的欲求充足（ $r = .290, p < .01$ ）、およびエンゲージメント（ $r = .250, p < .01$ ）と正の相関があり、調和性も心理的欲求充足（ $r = .164, p < .01$ ）とエンゲージメント（ $r = .175, p < .01$ ）と正の相関があった。さらに、心理的欲求充足とエンゲージメントの間に非常に強い正の相関（ $r = .713, p < .01$ ）が見られた。

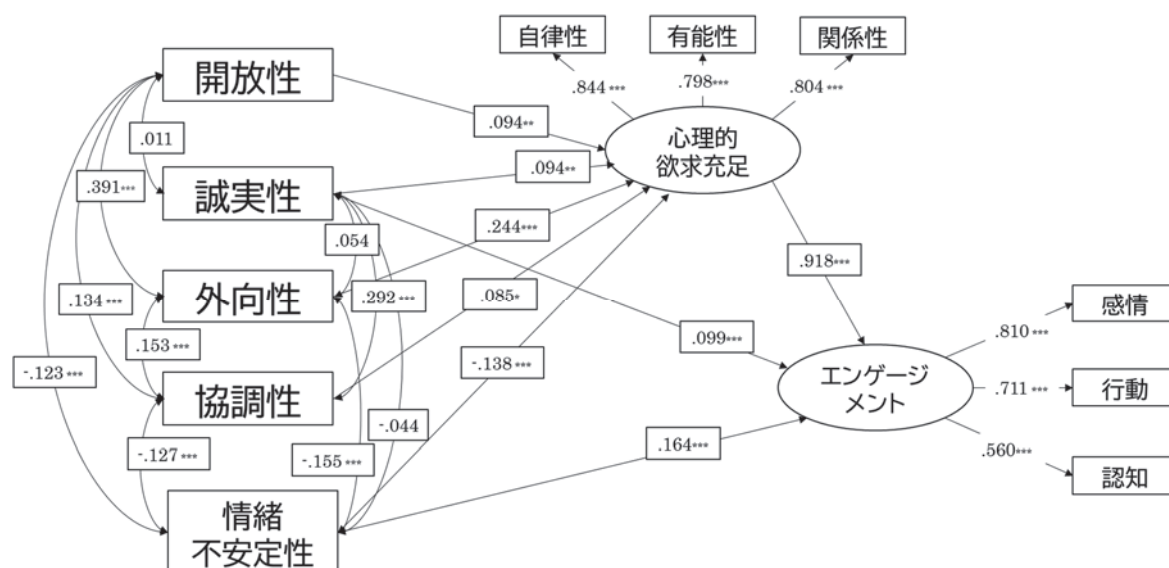
次に、RQ2に答えるために、上記の相関分析から得られた結果をもとに、モデルを作成し、共分散構造モデリングによるパス解析（SEM）を行なった。その結果を図1に示す。

IBM SPSS Amos を用いて SEM を実行した結果、図1のような関連性を示すモデルを得た。モデル適合度指標に関しても、RMSEAは.074で、.80以下であり十分な適合度を示している（Garnier-Villarreal & Jorgensen, 2020）。また、CFIも.95であり、.95以上であれば優れた適合度であるとされている（Beribisky & Cribbie, 2023）。

本研究では、構造方程式モデリング（SEM）を用いて、性格特性と心理的欲求充足との関連を調査した。結果として、開放性（ $\beta = .094, p < .01$ ）、誠実性（ $\beta = .094, p < .01$ ）、外向性（ $\beta = .244, p < .01$ ）、協調性（ $\beta = .085, p < .05$ ）は心理的欲求充足に正の影響を与えることが確認された。一方、情緒不安定性は心理的欲求充足に負の影響を与えることが示された（ $\beta = -.138, p < .01$ ）。

さらに、心理的欲求充足はエンゲージメント（ $\beta = .918, p < .01$ ）や自律性の欲求充足（ $\beta = .844, p < .01$ ）、有能性の欲求充足（ $\beta = .798, p < .01$ ）、関係性の欲求充足（ $\beta = .804, p < .01$ ）に対しても有意な影響を持っていた。最後に、エンゲージメントは感情的エンゲージ

メント ($\beta = .810, p < .01$)、行動的エンゲージメント ($\beta = .711, p < .01$)、認知的エンゲージメント ($\beta = .560, p < .01$) に対しても有意な影響を持っていた。これらの結果は、性格特性が心理的欲求充足に影響を与え、さらにそれがエンゲージメントやその他の欲求充足の下位変数に影響を与えることを示している。これらの知見は、教育心理学や英語教育学の視点から学習動機づけや学習者エンゲージメントを理解するための重要な洞察を提供するものである。



Note: モデル適合度指標 $\chi^2 = 195.078, df = 31, p < .000, \chi^2/df = 6.293, RMSEA [90\%CI] = .074 [.064, .084], CFI = .950, RFI = .897, TLI = .912$

図 1. 共分散構造分析によるパス解析 (SEM) の分析結果

6. 研究の考察

SEM の分析結果を踏まえて、Big Five の 5 つの性格特性と心理的欲求充足および英語学習へのエンゲージメントとの関係性について、以下の 4 つの観点から考察を行う。

まず、心理的欲求充足とエンゲージメントの関係について説明する。心理的欲求充足からエンゲージメントへの有意な正のパスが確認された。心理的欲求充足が満たされるほど、英語学習に対するエンゲージメントも増していくことを示している。これは、心理的欲求が満たされるほど、エンゲージメントが高まる、という多くの先行研究 (e.g. Jang et al, 2016, 2020; 染谷, 2021, 2023) の主張を支持するものであると考えられる。

次に、Big Five の 5 つの性格特性と心理的欲求充足とのそれぞれの関係について考える。開放性、外向性、誠実性、協調性がそれぞれ欲求充足へ正のパスを出していること、情緒不安定性からは負のパスが出ていることがわかった。開放性の高い生徒は、好奇心旺盛な性質が自律性の欲求を満たすことに繋がる。また、外向性の高い生徒は、授業内のペアワーク・グループワークにおけるクラスメイトとのやりとりによって、関係性の欲求が満たされる。さらに、誠実性の高い生徒は、セルフコントロールに長けている特徴が自律性の欲求充足へと繋がる。他を助けるこ

とが得意な協調性の高い生徒は、仲間と協力しながら共に学習を進めていくことで関係性の欲求が充足する。一方、情緒不安定性が増すほど、生徒は自らの不安や恐怖に向き合うことに追われ、心理的欲求充足とはかけ離れた状態になっていく可能性がある。

3点目として、情緒不安定性に伴う興味深い結果について考察する。情緒不安定性から心理的欲求充足へは負のパス、情緒不安定性からエンゲージメントへは直接正のパスが確認された。これは、情緒不安定性が強まるほど、心理的欲求充足は阻害される一方で、直接エンゲージメントが高まっていくことを表していると考えられる。前述の通り、情緒不安定性が高まると、不安や恐怖の対応に追われ、自身の心理的欲求充足が叶わなくなると考えられる。同時に、生徒は不安や恐怖から逃れるために（例えば、間違えることを回避するために）、結果として望ましい学習態度を取らざるをえなくなる、という状況が推測される。Friedman (2000) は、情緒不安定性を持つことによって、積極的に将来の健康問題を考え、健康行動をとることによって、結果的に健康を手に入れることが予測されるという、情緒不安定性の良い影響を主張する理論 (Healthy Neuroticism) を発表している。本研究の情緒不安定性において、まさに同様の現象が起きていると考えられる。

最後に、エンゲージメントに対する誠実性の働きに焦点をあてる。誠実性からエンゲージメントへ直接有意な正のパスが出ていることが確認された。誠実性の高い人が持つ勤勉さが、学習へのエンゲージメントを引き起こす可能性が示唆された。また、誠実性は、直接エンゲージメントへ働きかけることができることから、情緒不安定性と共に、強い影響力を持つ要因と捉えることができるだろう。

7. 教育的示唆

本研究で明らかにされた結果及び関係性に関する考察を踏まえ、学校現場において生徒の英語学習へのエンゲージメントを高めるために考えられる支援として、次の2点を紹介する。

1つ目は、情緒不安定性の高い生徒の不安や恐怖を軽減するという支援である。本研究で明らかにされた、情緒不安定性が高いために結果として学習にエンゲージせざるをえない、という状況は決して望ましい学習のあり方とは言えない。そこで、情緒不安定性を抑えることで、生徒の心理的欲求の充足を促し、そのうえでエンゲージメントに向かうというルートを確立することを提案する。Mueller et al. (2020) は、情緒不安定性の高い人のポジティブ感情は、パートナーのポジティブ感情とより密接に結びついているという、関係性に関わる肯定的な影響を報告している。よって、ペアワークなどの協働学習の際に、ポジティブな性質を持つ外向性の高い生徒と共に学習する機会を提供することで、情緒不安定性の高い生徒の不安や恐怖を減少させ、より自然に学習にエンゲージできる健全な学習環境を実現できると考えられる。

2つ目は良い特性を育むためのトレーニングの導入である。開放性、外向性、誠実性、協調性の4つの性格特性は、心理的欲求充足に繋がる良い影響を持つ要因であることから、これらの特性が低い生徒たちに対して、必要な特性を育成するトレーニングを行うことを提案する。Hudson et al. (2019) は、15週にわたる課題を通して参加者の性格特性の変容を観察したところ、開放性以外の得点の向上を観察した。現段階では全ての特性に対する効果は証明されていない

いが、今後の研究の進展によって、すべての特性においてトレーニングによる育成の可能性はあると思われる。良い影響を持つ性格特性を向上させることによって、より効率的に英語学習に対するエンゲージメントを引き出すことができると考えられる。

Big Five のそれぞれの特性を踏まえた、教育的介入の研究は決して多くはない。今後の研究の蓄積によって、より現実的で、より効果的に学習者を導いてくれる支援の在り方が明らかにされることが期待される。

謝辞

本研究は、全国英語教育学会第 48 回香川研究大会にて発表されたものに加筆修正を加えております。また、本研究に協力してくださった高等学校の生徒及び先生方に、感謝を申し上げます。

参考文献

- Bachman, L. F., & Palmer, A. S. (1996). *Language testing in practice*. Oxford University Press.
- Badridduja, F., Lessy, Z., Latipah, E., & Subaidi, S. (2022). Learning motivation in educational psychology: A comparative study between general educational psychology and Islamic educational psychology. *International Journal on Advanced Science, Education*, 5 (1), 1–9. <https://doi.org/10.33648/ijoaser.v5i1.158>
- Beribisky, N., & Cribbie, R. A. (2023). Evaluating the performance of existing and novel equivalence tests for fit indices in structural equation modelling. *The British Journal of Mathematical and Statistical Psychology*. <https://doi.org/10.1111/bmsp.12317>
- Busch, D. (1982). Introversion – Extraversion and the EFL proficiency of Japanese students. *Language Learning*, 32 (1), 109–132.
- Chamorro-Premuzic, T., & Furnham, A. (2003). Personality predicts academic performance: Evidence from two longitudinal university samples. *Journal of Research in Personality*, 37 (3), 319–338. [https://doi.org/10.1016/S0092-6566\(02\)00578-0](https://doi.org/10.1016/S0092-6566(02)00578-0)
- Christenson, S. L., Reschly, A. L., & Wylie, C. A. (2012). *The handbook of research on student engagement*. Springer
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. Plenum.
- Dörnyei, Z., & Ryan, S. (2015). *The psychology of the language learner revisited*. Routledge.
- Ehrman, M., & Dörnyei, Z. (1998). *Interpersonal dynamics in second language education: The visible and invisible classroom*. Sage.
- Freidman, H. S. (2000). Long-term relations of personality and health: Dynamisms, mechanisms, tropisms. *Journal of Personality*, 68 (6), 1089–1107. <https://doi.org/10.1111/j.1467-8851.2000.00181.x>

org/10.1111/1467-6494.00127

- Garnier-Villareal, M., & Jorgensen, T. D. (2020). Adapting fit indices for Bayesian structural equation modeling: Comparison to maximum likelihood. *Psychological Methods*, 25 (1), 46–70. <https://doi.org/10.1037/met0000224>
- Goldberg, L. R. (1981). Language and individual differences: The search for universals in personality lexicons. In L. Wheeler (Ed.), *Review of Personality and Social Psychology* (Vol. 2, pp. 141–165). Sage Publications.
- Hudson, N. W., Briley, D. A., Chopik, W. J., & Derringer, J. (2019). You have to follow through: Attaining behavioral change goals predicts volitional personality change. *Journal of Personality and Social Psychology*, 177 (5), 839–857. <https://doi.org/10.1037/pspp0000221>
- Jackson, J. J., Connolly, J. J., Garrison, S. M., Levine, M. M., & Connolly, S. L. (2015). Your friends know how long you will live: A 75-year study of peer-rated personality traits. *Psychological Science*, 26 (3), 335–340. <https://doi.org/10.1177/0956797614561800>
- Jang, H., Kim, E. J., & Reeve, J. (2012). Longitudinal test of self-determination theory's motivation mediation model in a naturally occurring classroom context. *Journal of Educational Psychology*, 104 (4), 1175–1188. <https://doi.org/10.1037/a0028089>
- Jang, H., Kim, E. J., & Reeve, J. (2016). Why students become more engaged or more disengaged during the semester: A self-determination theory dual-process model. *Learning and Instruction*, 43, 27–38. <https://doi.org/10.1016/j.learninstruc.2016.01.002>
- Leo, F. M., Mouratidis, A., Pulido, J., López-Gajardo, M. A., & Sánchez-Oliva, D. (2020). Perceived teachers' behavior and students' engagement in physical education: The mediating role of basic psychological needs and self-determined motivation. *Physical Education and Sport Pedagogy*, 25 (4), 361–375. <https://doi.org/10.1080/17408989.2020.1734701>
- Mammadov, S. (2022). Big five personality traits and academic performance: A meta-analysis. *Journal of Personality*, 90 (2), 222–255. <https://doi.org/10.1111/jopy.12663>
- McCrae, R. R., & Costa Jr. P. J. (1997). Conceptions and correlates of openness to experience. In R. Hogan, J. A. Johnson, & S. R. Briggs (Eds.), *Handbook of personality psychology* (pp. 825–847). Academic Press.
- Mueller, S., Wagner, J., Hueluer, G., Hoppman, C. A., Ram, N., & Gerstorf, D. (2020). Moody and thin-skinned? The interplay of neuroticism and momentary affect in older romantic couples. *British Journal of Psychology*, 112 (1), 315–341. <https://doi.org/10.1111/bjop.12452>
- Noftle, E. E., & Robins, R. W. (2007). Personality predictors of academic outcomes: Big Five correlates of GPA and SAT scores. *Journal of Personality and Social Psychology*, 93 (1), 116–130. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.93.1.116>
- Norman, W. T. (1963). Toward an adequate taxonomy of personality attributes: Replicated factor structure in peer nomination personality ratings. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 66 (6), 574–583. <https://doi.org/10.1037/h0040291>

- O'Connor, M. C., & Paunonen, S. V. (2007). Big Five personality predictors of post-secondary academic performance. *Personality and Individual Differences*, 43 (5), 971–990. <https://doi.org/10.1016/j.paid.2007.03.017>
- Poropat, A. E. (2009). A meta-analysis of the five-factor model of personality and academic performance. *Psychological Bulletin*, 135 (2), 322–338. <https://doi.org/10.1037/a0014996>
- Poropat, A. E. (2014). A meta-analysis of adult-rated child personality and academic performance in primary education. *British Journal of Educational Psychology*, 84 (2), 239–252. <https://doi.org/10.1111/bjep.12019>
- Reeve, J. (2018). *Understanding Motivation and Emotion*. John Wiley & Sons.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2017). *Self-determination theory: Basic psychological needs in motivation, development, and wellness*. Guilford Publications.
- Tackett, J. L., & Lahey, B. B. (2017). Neuroticism. In T. A. Widiger (Ed.), *The Oxford Handbook of the Five Factor Model* (pp. 39–56). Oxford University Press.
- Tobin, R. M., & Gadke, D. L. (2015). Agreeableness. In J. D. Wright (Ed.), *International Encyclopedia of the Social & Behavioral Sciences* (2nd ed., pp. 463–470). Elsevier.
- Vedal, A. (2014). The Big Five and tertiary academic performance: A systematic review and meta-analysis. *Personality and Individual Differences*, 71, 66–76. <https://doi.org/10.1016/J.PAID.2014.07.011>
- Verhoeven, L., & Vermeer, A. (2002). Communicative Competence and personality dimensions in first and second language learners. *Applied Psycholinguistics*, 23 (3), 361–374. <https://doi.org/10.1017/S014271640200303X>
- 阿部慎吾 (2023). 「学校場面：学業成績，学業行動，いじめ」. In 谷伊織，阿部慎吾，& 小塩慎司 (編)，『Big Five パーソナリティハンドブック (pp. 184-187)』福村出版.
- 梅本貴豊・伊藤崇達・田中健史朗 (2016). 「調整方略，感情のおよび行動的エンゲージメント，学業成果の関連」『心理学研究』87 (4)，334–342.
- 鹿毛雅治 (2013). 「学習意欲の理論 動機づけの教育心理学」金子書房.
- 川本哲也 (2023) 「神経症傾向 (情緒不安定性)」谷伊織・阿部慎吾・小塩慎司 (編)『Big Five パーソナリティハンドブック (pp.28–31)』福村出版.
- 小平英志・布施光代・安藤史高 (2018) 「児童のパーソナリティと積極的授業参加行動ー主要 5 因子性格検査を用いた検討」『日本福祉大学子ども発達学論集』10，39–47.
- 谷伊織 (2023). 「外向性」. In 谷伊織・阿部慎吾・小塩慎司 (編)『Big Five パーソナリティハンドブック (pp. 24–27)』福村出版.
- 並川努・谷伊織・脇田貴文・熊谷龍一・中根愛・野口裕之 (2012). 「Big Five 尺度短縮版の開発と信頼性と妥当性の検討」『心理学研究』83，91–99.
- 橋本泰央 (2023). 「基本次元の探求から 5 次元への集約」. In 谷伊織・阿部慎吾・小塩慎司 (編)『Big Five パーソナリティハンドブック (pp. 8–15)』福村出版.
- 廣森友人 (2006). 「外国語学習者の動機づけを高める理論と実践」多賀出版.
- 平野真理 (2021). 「パーソナリティ研究の動向と今後の展望ービッグファイブ，感受性，ダークトライアドに焦点をあててー」『教育心理学年報』60，69–90.

- 文部科学省 (2017a). 「小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 外国語・外国語活動編」. 開隆館出版.
- 文部科学省 (2017b). 「中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 外国語編」 開隆館出版.
- 文部科学省 (2018). 「高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説 外国語編」 開隆館出版.
- 三枝高大 (2023). 「開放性 (経験への開放性)」. In 谷伊織・阿部慎吾・小塩慎司 (編) 『Big Five パーソナリティハンドブック (pp. 32–35)』 福村出版.
- 染谷藤重 (2020). 「高校生の英語における基本的欲求充足尺度の作成の予備調査—内発的動機づけに及ぼす影響—」 『上越教育大学教職大学院研究紀要』 第 7 巻, 217–223.
- 染谷藤重 (2021). 「高校生の英語の授業への動機づけと英語学習へのエンゲージメントとの関連性の検証—SGH 指定校に関するケース・スタディー—」 『JAFLE Bulletin』 第 24 号, 61–79.
- 染谷藤重 (2023). 「自律性支援・基本的心理欲求及び行為主体的エンゲージメントの関連性の検証—自己決定理論における二重過程モデルを通して—」 『中部地区英語教育学会紀要』 第 52 号, 85–92.
- 安田利典・鈴木駿吾 (2017). 「学習者の性格が英語運用能力に与える影響—認知行動水準を媒介とした教育的配慮—」 『Eiken Bulletin = 「英検」 研究助成報告』 29, 167–183.

